

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370513

研究課題名(和文) 西洋資料の外国語としての視点からアプローチする近代“官話”の総合的研究

研究課題名(英文) The study of Mandarin Chinese analyzing from the perspective of foreign language learning of Westerns in Modern Times.

研究代表者

塩山 正純 (SHIOYAMA, MASAZUMI)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：10329592

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代西洋人による官話課本と官話訳聖書等の記述に基づき、彼らが外国語として学習した官話像を考察したものである。近代西洋人の官話の認識については、当時の英仏を中心に、代表的な課本に記述された定義の変化を概観した。個別の官話研究については、メドハースト、エドキンス、ロブシャイド等の記述を考察し、彼らが北方、南方、その他の官話の相違点に関する認識を継承・発展させた過程を指摘した。また、メドハーストの官話訳聖書と官話課本が19世紀半ばの官話の特徴を考察する際に有用であることを指摘した。さらに、主に西洋料理のレシピや問答書の本文を資料として、近代西洋人が記述した官話文の特徴についても考察した。

研究成果の概要(英文)： This study explores the Mandarin that learned by Westerns as foreign language based on the descriptions in the textbooks and the Bible of the Mandarin version in Modern Times.

The changes of the definition of Mandarin that were provided in textbooks by modern Westerns mainly in UK and France were listed in chronological order. The study of Mandarin analyzed by Westerns, those were carried out to examine the features of the studies by Medhurst, Edkins and Lobscheid. Western scholars point out the important difference between Northern, Southern and the other Mandarin. We suggest an application of the Bibles translated by Medhurst into Mandarin and his Mandarin textbooks representing the characteristics of Mandarin in middle of the 19th century.

The analysis of Mandarin that Westerns described as sentences was mainly performed by comparing the text written in colloquial style of Western recipe and the dialogic writing of catechetical books published in the 19th century.

研究分野：中国語学

キーワード：官話 近代欧人 外国語としての中国語理解 官話訳聖書 官話教科書 漢訳聖書 異文化翻訳

1. 研究開始当初の背景

近世以降の中国には、“官話”と呼ばれる口頭語の共通語が存在し、一方で書面語にも口頭語に近接する記述体としての“白話”が存在した。“官話”を対象とした研究に関しては、1970年代に尾崎實が西洋資料の有用性に着目し、さらに内田慶市(2000)も漢訳聖書の資料価値を指摘してきたが、これまでに大塚秀明(1996)、古屋昭弘(1996)、何群雄(2000)、千葉謙悟(2010)らの特定の個別資料に関する論考を除けば、西洋資料を活用した“官話”研究は、資料数が膨大で、かつ近年までは入手困難であったこともあり、内田(2006以降)の「西洋人の中国語文法書における“官話”の定義の概略」以降では、近代を更に通時的に網羅した詳細な研究は殆ど進展しなかったと言える。最近になり、中国語の近世・近代語を専門とする若手研究者の間で、域外資料の「非母語話者」的視点からの“官話”研究の機運が高まり、中国近世語学会(2011)で「周縁資料による“官話”研究」を主題とするワークショップが組織され、報告者も「西洋資料が記述した“官話”の諸相」について基礎的な報告を行い、本課題の着想の一つのきっかけとなった。

近代中国における東西言語文化交流において、西洋人は「字典編纂」「中国語研究」「聖書の漢訳」の三つに代表される言語研究の成果を残したが、いずれも非母語話者による外国語研究の実践として記述されたものであり、これらは当時の中国語の諸相を「外国人が外国語としての中国語を如何に学習し、中国人の思考・発想を如何に理解したのか」という視点から研究することが可能な恰好の資料であると言える。さらに、これらの資料は現代の我々が如何に外国語と付き合うか、と言う問題にも大いにヒントを与えてくれる可能性を持っていると言える。本研究課題の申請当時までの個別的な研究の蓄積はすでに一定のレベルに達していたとは言えるが、“官話”の全体像まで視野に入れた通時的・体系的な研究の完成には更に相当の蓄積が必要な状況であった。

本研究課題は西洋人の中国語研究文献の記述と官話訳聖書の翻訳文を資料として“官話”の虚像と実像にアプローチするものであり、上述の資料の有用性、本研究の課題と特徴、準備状況等は、申請段階では以下の通りであった。

(1) 近代西洋人の中国語研究文献にはタームとしての“官話”が頻出することから、ターム“官話”に関する記述の具体例を蓄積することで、“官話”像を解明することが期待できるが、本課題の申請当時では、個別例の記述内容まで網羅的に踏み込んだ研究が無かったと言える。

(2) 西洋人の中国語研究の記述と官話訳聖書の

本文を資料として扱い、表現・語彙の異同対照調査を行うことにより、“官話”と、“官話”に近接する書面語である“白話”の語学的特徴を相対的に抽出することができる。

(3) 官話訳聖書の基礎となった初期中国語訳聖書(文言、文白混淆体、浅文理訳)については、報告者自身による一定程度の研究の蓄積と作成済みの本文電子データ等を基礎資料として利用できる環境が申請時点で一定程度整っていた。

(4) 官話訳聖書については、過去に語学的アプローチによる研究は乏しく、他の研究プロジェクトの成果も活用して官話訳聖書の本文データを増補することで、さらに効率的な研究活動が可能となることから、電子テキスト、目録データベース等の基礎資料を整備する意義があった。

本研究では、近代西洋人による中国語研究の“官話(Mandarin)”に関する記述と、特に北京官話と南京官話による官話訳聖書(申請時は湖北官話についても視野に入れていたが、これは今後の継続的な課題とする)を基礎資料とし、同時代の白話作品や吏文等の域内書面語資料との比較対照を通して考察を行うことで、近代中国の共通口頭語である“官話”の特徴を解明し、近代「外国人による外国語としての中国語、つまり中国人的思考・発想の表現としての中国語の理解」の実像の一端に迫ることを期待したのである。

2. 研究の目的

あらゆる言語文化の事象にはそれ本来の実像と、イメージで語られる虚像とがあるが、近世以降の中国の口頭語の共通語である“官話”も、当時の中国人の言語生活の解明にとって極めて重要なキーワードでありながら、イメージでしか語られて来なかった事象の一つである。そこで本研究課題は、近代西洋人の中国語研究から近世・近代の“官話”にアプローチし、西洋人が「非母語話者」的視点から記述した研究書・字典と、東西異文化翻訳の実践としての“官話”訳聖書を基礎資料として、「西洋人による記述の分析」と「言語表現の個別・具体例の集積」によって“官話”の虚像と実像を解明し、さらに現代の外国語学習への応用も視野に「外国人による外国語としての中国語理解」の実相を明らかにすることを視野に入れた。同時に本研究課題は、今後の自他の継続的な研究のために、“官話”関連の原典資料と研究文献の目録・データベース構築も目指した。

本研究課題は第1段階で、近代西洋人による官話研究文献の原典とそれに関する先行研究を収集し、日中欧の研究目録を作成することとした。さらに官話訳聖書等のテキスト資料について、既存

の所蔵情報をもとに、目録を統合・整理し、さらに現地資料調査・収集によって既存目録の遺漏を補い、さらに、主要な官話訳聖書原典の閲覧調査によって、新たな資料を発掘し基礎資料を充実させることを目指した(何れの作業も、目下継続中)。

第2段階では、官話研究文献と代表的な官話訳聖書の本文を電子テキスト化し、本文対照表、語彙索引を作成し、自他の研究のための基礎資料を整備することとし、これらの基礎資料を利用した考察によって、「西洋人の視点で観察された各官話の諸相」の解明を目指した(目下、継続中)。

また本研究課題は、「官話」像の解明をキーワードに、近代西洋人の中国語研究の記述とその中国語表現それ自体について語学的視点からアプローチするものであり、これについては以下の3つの特色・独創性を挙げることができる。

(1)官話訳聖書を近代中国の口頭語の共通語(官話)研究の資料として活用すること。従来、漢訳聖書の語学研究資料としての価値は重視されて来なかったが、報告者は申請時点までに行っていた初期中国語訳聖書の資料整備と文体・語彙に関する考察の成果を応用して、官話研究の新たな方法を提案できると考えた。

(2)今後の継続的な研究のために基礎資料を整備すること。従来「官話・白話」研究は、文学作品等の中国国内資料を扱ってきたが、豊富な西洋資料からのアプローチを可能にするために、「西洋人による官話研究の著作」と「官話訳聖書の本文」の基礎資料データベースを整備することとした。

(3)基礎資料を広く公開すること。西洋資料の電子テキスト、本文対照表、語彙索引、目録等の基礎資料を積極的にウェブ公開し、成果公開促進費等を利用して公刊を目指した。研究成果を積極的に中文・欧文で発表することで、日本における西洋資料による中国語研究の進展を広く海外の学界にもアピールすることを企図した。

さらに、申請時点で予想される本研究課題の結果とその意義として次の2点を挙げた。

(1)西洋人による中国語(官話)研究の記述と官話訳聖書の翻訳から、そこに表現された「官話」像を明らかにすることができ、また「官話」像を考察する過程で、西洋人の観察した「白話」の実相を相対的に明らかにすることも期待できる。さらに、朝鮮、満州、蒙古、琉球、唐話など、西洋以外の周縁資料からアプローチする研究とも連携することで、「周縁から中心を探る」という新しい視点から、「官話」研究をより一層、多面的に充実させることができ、さらに、今後の西洋資料を扱った継続的な研究のための基盤の整備に貢献できる。

(2)本研究により、周縁分野の研究にも資料デ

ータを提供することで、官話や白話の語学的研究にとどまらず、東西交流史、文化交渉史、思想史、宗教史、翻訳史など領域横断的研究に貢献できる。また、本研究課題で予想される成果は、「近代西洋人が非母語話者の視点から外国語としての中国語を如何に分析したのか」という問題に新たな視点とアプローチの可能性を提供し得る。

3. 研究の方法

本研究課題では、継続的に資料調査・収集を行うことで必要とされる文献を増補し、近代西洋人による中国語研究の著作と代表的な官話訳聖書、関連する周縁資料を基礎資料として、比較対照の手法によって、「官話」像と「欧人の外国語理解」の実相を考察することとした。また、本文電子テキストデータ・語彙索引など、中国語学にとどまらず、聖書の和訳史、東西文化交渉史、宗教史など関連分野の研究でも利用できる基礎資料データベースの作成を目指した。報告時点で、データベースとしては公開できていないが、作成済みデータについては、依頼に応じて随時提供している。

研究期間の前半2年間は、官話訳聖書と西洋人による中国語研究文献の調査収集とデータ入力・整理、解題・語彙索引の作成による基礎資料の整備に力点を置いた。後半2年間は資料の調査・収集を継続しつつ、官話テキスト本文から官話の語彙・語法の特徴を抽出した。同時に近代西洋人の中国語研究におけるキーワードとしての「官話」について分析した記述を整理することで、「近代西洋人が観察した官話の虚像と実像」について総合的に考察した。考察の結果は、国内外の学会、学術誌で逐一発表し、上述の基礎資料の公開・提供と併せて、研究成果を広く社会に還元した。

本研究課題では、申請書に記載した研究目的【本研究課題の概略図】の工程に沿って、塩山正純(代表者:統括)と朱鳳(分担者:とくに解題・注釈・資料収集(文法書、字典、書簡)を分担)の二人体制で4年間の研究活動を行った。

例えば、初年度〔平成26年度〕は、資料の調査収集と本研究の基盤となる基礎作業を行う期間と位置づけ、以下の3項目の作業と考察を行った。

第一に基礎作業と考察では、先ず既存の目録・Web上の文献所蔵情報の調査による官話訳聖書と西洋人の中国語研究文献をリストアップと収集、現有資料の整理を行った。

そして第二に、現有資料の本文テキスト入力と電子テキストの加工整理と、収集した資料の整理、複写資料の印刷・簡易製本作業。

(3)収集した文献の整理、官話訳聖書本文対照表の作成、文体・語法・語彙の特徴の考察。

2. 資料調査

(1) 国内調査：関西大学図書館増田文庫、同東西学術研究所鱗沢文庫、尾崎文庫等での閲覧調査・収集。

(2) 海外調査：官話訳聖書、宣教師関連資料を多数所蔵する海外の各図書館での原典資料の閲覧調査・収集。

3. 成果報告等

国内外の学会での経過報告・成果発表。

続く3年間も、この基礎的なサイクルを繰り返すことで資料を蓄積した。

4. 研究成果

前項に記述した方法によって、4年間の各年度で以下の通りの研究活動を行い、成果を公表した。

〔1年目(26年度)〕

代表者(塩山正純)と分担者(朱鳳)がそれぞれ収集・整理した資料をもとに分析を行い、主に以下の3点について、研究活動を行い、成果を公表した。

(1) 官話訳聖書を資料とする研究では、19世紀の西洋人宣教師メドハーストの官話訳聖書と、同じくメドハーストによってその前後に出版された官話会話課本を資料として、官話の南北差のキーワードとなる特徴的語彙を抽出し、その使用状況から、各資料で表現された“官話”の言語的特徴に関する考察に着手し、成果の一部を報告した。これについては2年目(27年度)以降も、更に詳細に分析を継続して現在に至る。また、官話訳を含む代表的な漢訳聖書本文に使用されている音訳語の継承関係と訳語創造の特徴についても考察した。

(2) 会話課本を資料とする分析では、19世紀の宣教師エドキンスの中国語会話教科書 *Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language* の初版から5版までの各版の本文を翻訳・電子テキスト化し、その語彙的特徴に関する考察に着手した。

(3) 官話・漢語の周縁に関する事象についても考察の対象に加え、日本の幕末維新期における唐通事の英語学習と宣教師の交流という観点から、唐通事の家系出身の何礼之による翻訳活動に関する考察に着手した。

〔2年目(27年度)〕

代表者(塩山正純)と分担者(朱鳳)が主に1年目のポルトガル現地調査(関西大学外国語学部教授・奥村佳代子氏との共同調査)にて収集した官話会話課本その他の資料と、期間中に収集した資料を整理し、主に以下の3点について分析・考察し、その成果の一部を論文・口頭報告で発表した。

(1) 官話課本・英華・華英字典を資料とする分析については、まず、19世紀の英語による中国語課本と字典類における官話に関する記述を抽出・分析し当時の(近代における)西洋人の目から見た官話像の考察を試みた。さらに、ゴンサルベスの会話稿本を資料として、同書での官話の文法に関する記述の特徴について考察した。

(2) 官話訳を含む漢訳聖書の分析については、西洋諸語を原語とする聖書語彙の中国語への異文化翻訳の中でも特に音訳語を対象として考察した。

(3) 官話・漢語の周縁に関連する資料の分析については、西洋の文化を中国人に普及するために出版された様々な漢訳書のうち、官話によって執筆・編纂された書物(西洋料理のレシピ)を資料として、語学学習・研究を目的としない周縁の文献で使用された官話の文体的特徴と訳語の創出と定着に関して考察した。

また、28年3月にはオックスフォード大学図書館、大英図書館、ライデン大学図書館にて資料調査を行い、官話で執筆された資料数点を収集した。

〔28年度(3年目)〕

前年度末(27年度・2年目)に代表者(塩山正純)と分担者(朱鳳)が、イギリス(オックスフォード大学、大英図書館)及びオランダ(ライデン大学)における現地調査(関西大学外国語学部教授・奥村佳代子氏、北陸大学国際コミュニケーション学部講師・伊伏啓子氏との共同調査)と、当該年度(28年度・3年目)夏にパチカンにおける現地調査、その他国内各館で収集した官話会話課本や西洋人が官話で執筆した各種のテキストその他の資料を整理・テキスト入力し、前年度と同様に以下の3つの方面について分析・考察し、その研究成果を論文・口頭報告によって発表した。

(1) 前年度は英華・華英を中心とした字典類におけるキーワードとしての官話に関する記述の内容を分析したが、当該年度は主に19世紀に出版された英語による官話課本・研究書の官話に関する記述を分析の対象として、引き続き西洋人による“官話”像について考察した。個別の資料に関する研究については、代表者(塩山正純)がエドキンスの官話課本の初版から第5版を対象として、語彙・音声面の記述の特徴について考察し、分担者(朱鳳)がモリソンの課本本文について考察した。

(2) 漢訳聖書を資料とする分析については、西洋諸語の聖書原典と漢訳聖書の文理訳本文を比較対照の資料として、異文化翻訳の一つの事例としての時間表現に関して考察した。なお、この考察は今後さらに官話訳聖書にまで考察範囲を広げていく上での基礎作業として位置づけている。

(3) 上記以外の官話・漢語資料を対象とする分析については、当該年度は本研究課題のメインテーマである近代西洋人による外国語としての官話研究に関連して、近代の日本人による官話学習についても考察を行い、官話課本、旅行記における記述について分析した。

〔29年度（4年目・最終年度）〕

代表者（塩山正純）がバチカン図書館、大英図書館、関西大学東西学術研究所、国立国会図書館その他機関で調査収集した資料と、分担者（朱鳳）がサンフランシスコ大学での在外研究の機会に調査収集した官話関連資料、西洋人が官話で執筆した各種テキストその他の資料を順次整理・テキスト入力し、前年度までと同様に以下の3点について分析・考察を行った。研究成果は、前年度の口頭報告の内容を発展させて、論文として発表した。

(1) 個別の官話課本の記述に関する分析については、前年度までの字典類と課本類における官話に関する記述の分析を継続し、さらに19世紀前半に出版されたフランス語による官話課本・研究書を対象として、近代西洋人による“官話”像についてさらに範囲を拡大して考察した。また個別資料については、代表者（塩山正純）がエドキンスの課本を対象とする語彙・音声面の記述の特徴に関する考察をさらに継続的に考察した。

(2) 漢訳聖書を資料とする分析については、前年度に続いて、文理訳聖書の本文に記述される異文化翻訳の一つの事例としての時間表現について、西洋諸語の聖書原典として比較対照しつつ考察した。これについては、さらに官話訳聖書にまで考察範囲を広げていくことを課題としている。

(3) 上記以外の官話・漢語の資料については、近代西洋人にとっての官話研究の根幹である官話認識のうち、19世紀前半のフランス語による研究書の記述の変遷について考察した。さらに、外国語としての官話学習という観点に関連して、近代日本人の官話学習についても引き続き考察し、『北京官話全編』（官話課本）、『東亜同文書院大旅行誌』（旅行記）における記述について分析した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

- (1) 塩山正純、艾約瑟の官話課本浅析、国際漢学、査読有、14号、2018、96-101
- (2) 塩山正純、『北京官話全編』に記述された児化語彙について、内田慶市編『北京官話全編の研究・下巻』、査読無、巻号無、2018、65-75

- (3) 塩山正純、『耶穌教官話問答』にみる19世紀中葉の官話の一端—『古新聖經問答』との比較を通して—、言語と文化、査読無、38号、2018、63-79
- (4) 塩山正純、近代西洋人がみた‘官話’の諸相—19世紀の中国語研究書の記述を中心に—、言語と文化、査読無、37号、2017、93-111
- (5) 塩山正純、エドキンスの官話教科書が記述したことから、関西大学東西学術研究所紀要、査読有、50輯、2017、115-125
- (6) 塩山正純、『西洋料理と中国語—造洋飯書』（1866）を例に—、東アジア言語接触の研究、査読無、巻号無、2016、275-300
- (7) 塩山正純、『ロプシャイドが教科書に記述した近代漢語』、言語と文化、査読無、35号、2016、57-69
- (8) 朱鳳、『漢訳西書における音訳語の継承と創造』、東アジア言語接触の研究、査読無、巻号無、2016、259-274
- (9) 塩山正純、『近代西洋人は“官話”をどう見てきたか—19世紀の英華・華英字典の記述を中心に—』、関西大学中国文学会紀要、査読無、37号、2016、155-172
- (10) 塩山正純、『近代西洋人は“官話”をどう見てきたか—19世紀の英華・華英字典の記述を中心に—』、関西大学中国文学会紀要、査読無、37号、2016、155-172
- (11) 塩山正純、『早期漢譯聖經的文體及其影響』、愛知大学文学論叢、査読無、151号、2015、114-138
- (12) 塩山正純、『漢訳聖書からみる西洋人宣教師の中国語』、言語と文化、査読無、32号、2015、1-15
- (13) 朱鳳、『何礼之と宣教師の交流について』、環流する東アジアの近代新語訳語、査読無、巻号無、2014、207-222

〔学会発表〕（計19件）

- (1) 塩山正純、『何禮之の譯著《經濟便蒙世渡の杖（謀身之術）》の幾個特徴』、第二屆中國翻譯史國際研討會、2017年12月14日、香港・香港中文大学
- (2) 塩山正純、『十九世紀上半葉法国学者編写的漢語課中的“官話”、漢語國際化視野下的漢語全球教育史國際學術研討會&世界漢語教育史研究学会第九屆年會』、2017年10月21日、中国・華東師範大学
- (3) 朱鳳、『Paul Perny’s DIALOGUES CHINOIS - LATINS -A Comparative Study on a Jesuit’s Manuscript』、2017年06月27日、San

- Francisco University Ricci Institute
- (4) 塩山正純、聖經中の時間表現和漢訳、東アジア文化交渉学会第9回年次大会、2017年05月14日、中国・北京外国語大学
- (5) 塩山正純、『北京官話全編』に記述された児化語彙について、平成28年度東西学術研究所言語接触研究班第17回研究例会「『北京官話全編』をめぐる」、2017年02月19日、関西大学
- (6) 塩山正純、漢訳聖書にみる「時間」の翻訳、平成28年度東西学術研究所言語接触研究班第16回研究例会「資料から見る東西の言語交渉」、2017年01月21日、関西大学
- (7) 朱鳳、『拜客訓示』の印刷版について、平成28年度東西学術研究所言語接触研究班第16回研究例会「資料から見る東西の言語交渉」、2017年01月21日、関西大学
- (8) 塩山正純、19世紀西洋人眼中的中国通用語言 - 以漢英課本為核心資料、漢語教材史国際学術研討会 - 世界漢語教育史研究学会第八屆年會、2016年11月05日、中国・中山大学
- (9) 塩山正純、19世紀西洋人對“官話”的認識 - 以中文課本的描述為中心 -、中華文明現代化研究與創意中心「全球化下的中華文明 - 品牌與品味」論壇、2016年05月30日、台湾・東吳大学
- (10) 塩山正純、艾約瑟の官話課本淺析、東アジア文化交渉学会第8回年次大会、2016年05月07日、関西大学
- (11) 塩山正純、西洋料理と近代中国語——『造洋飯書』(1866)を例に、関西大学東西学術研究所言語接触研究班 2015年度第10回研究例会、2016年01月23日、関西大学東西学術研究所
- (12) 朱鳳、江沙維手稿之考証 - 有關對漢語的語法分析、近現代漢語國際教育史文獻發掘與研究・第七屆世界漢語教育史國際学術檢討會、2015年11月06日、中国・厦門大学
- (13) 塩山正純、Western cuisine and Chinese language in modern China-Analysis of the vocabulary of Zao Yangfan Shu (1866)西餐與近代漢語-以《造洋飯書》為例、Sixth Italian-Japanese-Chinese Researchers Seminar on Language and Culture Relations 第六屆意日中研究生語言文化交流研究論壇、

2015年09月14日、イタリア・ローマ大学東方学院

- (14) 塩山正純、淺論近代英華辭典對“官話”解釋的演變、「英華字典與近代中國」學術研討會、2015年08月25日、台湾・中央研究院近代史研究所
- (15) 朱鳳、幕末維新における唐通事の英語学習と西書翻訳に関する研究-何礼之と宣教師の交流について-、学内研究助成制度研究プロジェクト発表会、2015年02月25日、京都ノートルダム女子大学
- (16) 塩山正純、エドキンスが教科書に記した官話、関西大学東西学術研究所言語接触研究班・最前線シリーズ連続研究例会「周縁資料による近代漢語研究の最前線」、2015年01月25日、関西大学
- (17) 塩山正純、麥都思の官話譯《聖經》與其語言特點、“海外漢語方言暨世界漢語教育史”国際学術研討會—第四屆海外方言國際学術研討會暨第六屆世界漢語教育史研究学会年會、2014年11月15日、中国・深圳大学
- (18) 塩山正純、官話譯聖經和西洋傳教士的官話研究、東アジア文化交渉学会第6回年次大会、2014年05月09日、中国・復旦大学
- (19) 朱鳳、漢訳聖書における音訳語の継承と創造、東アジア文化交渉学会第6回年次大会、2014年05月09日、中国・復旦大学

〔図書〕(計0件): 該当無し。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等: 該当無し。

6. 研究組織

(1)研究代表者: 塩山 正純 (SHIOYAMA, Masazumi)
愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号: 10329592

(2)研究分担者: 朱 鳳 (SHU, Ho)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・教授

研究者番号: 00388068

(3)連携研究者: 該当無し。

(4)研究協力者: 該当無し。

以上の通り相違ありません。